

も縁  
と深い  
日本

## チリ「モアイ像」世界遺産30年

リ領イースター島で24日、巨大なモアイ像で知られるラパヌイ国立公園が国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産に登録されてから30周年を記念する行事が行われた。

島はチリの本土から約3700キロ離れた「絶海の孤島」。島の4割を占める国立公園には、先祖を崇拝する目的で造られた最長20メートルを超える石像のモアイが約900体残されている。食料危機から部族間の争いに発展したことで17世紀にはモアイの文化が廃れ、祭壇に並んだモアイが倒されたとされるが、モアイを巡る謎は今も多い。

24日はかつての採石場で、記念のプレートがお披露目された。島では内外の関係者が集まり持続可能な観光などを話す会合を26日まで開催。2022年には山火事の影響で多くのモアイが損傷を受けた。ユネスコの地域責任者は「独自の文化的伝統の生きた証拠だ」と保全の重要性を強調した。

島と日本とのつながりは深い。日本のテレビ番組をきっかけにクレイン大手タダノ（高松市）が、倒れていたモアイの修復に協力。同社



ラパヌイ国立公園の世界遺産登録から30年を記念してお披露目されたプレート（中央）＝24日、チリ・イースター島（先住民共同体マウヘヌア提供・時事）

が寄贈した3台目のクレインが今も島で活躍。これが縁となり、今度、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町に、現地の石を使ったモアイ像が島から贈られた。